

一粒かき生産技術の移転について

技術支援部 主任研究員 平田 靖

ねらい

水産海洋技術センターでは県内水産業の振興のため、技術開発と同時に、その成果の技術移転を行っている。当センターが開発した、三倍体一粒かき生産技術は、高付加価値の殻付きかきを生産する技術としてすでに県内各地に技術移転され、広島かきの新ブランド創出に寄与している。今回は、江田島市水産物等販売協議会（以下水販協）が、当センター、県および市の行政機関の支援のもとブランド化に取り組んでいる三倍体一粒かき「ひとつぶくん」の事例を中心に、当センターの技術移転事例として紹介する。

概要

1 「三倍体一粒かき」とは

三倍体マガキは夏季に産卵が抑制され、周年身入りが良いマガキとして当センターで種苗生産技術を開発した。現在、技術移転した社団法人広島県栽培漁業協会（以下栽培協会）から県漁連を通して県内生産者に種苗が販売され、すでに「かき小町」ブランドとして定着しつつある。一方、一粒かきは、稚貝の段階から一粒単位で飼育することで、殻の形状が均一で中身が充実した殻付きかきである。当センターはH13 から種苗生産技術、H18 から効率的な養殖カゴについて研究開発を行った。開発技術は栽培協会へ技術移転し、現在、「三倍体」と「一粒かき」両者のメリットをあわせ持つ「三倍体一粒かき」（図1）種苗が年間70万個販売されている。

2 江田島市でのブランド化の取り組みと課題

江田島市では、市内11漁協と各漁協青年部代表者等により構成された水販協が主体となって、三倍体一粒かきのブランド化に取り組み、H18年から「ひとつぶくん」として販売を開始している。水販協では、現在16万個の種苗を受入れ、約3.7万個を販売、約600万円を売上げる（図2）とともに安定生産、品質確保、衛生対策、商品PRと販路開拓などの課題に取り組んでいる。生産品の評価は高いが、購入した種苗からの商品化率が10～30%と低いことが経営安定化の妨げとなっている。

3 平成22年度の取り組み

今年度、水販協では「商品化率50%」を目標に育成試験を実施した。当センターでは江田島市および県水産課とともに、これまでに研究成果をもとに技術支援を行った。これまでの結果から、殻の大きさが3cm以下の稚貝の歩留まりが商品化率のネックになっている。このため、当センターは3cm以下の稚貝管理方法として、攪拌効果が高いポリエチレン製浮きカゴの導入を提案した（図3）。育成試験の結果、浮きカゴは従来の方法に比べ高い生残率を示した（図4）が、天然発生のマガキ稚貝等の付着（図5）や、使用する時期によっては効果がみとめられない等の問題が浮き彫りとなった。

今後の展開

開発技術の現場への移転および定着においては、養殖海域毎の特性といった現場の状況に応じて、技術を適用する時期や場面的確かな選択、部分的な改良が必要になることから、関係機関と協力のうえ生産者グループの検討会への参加（図6）など継続した技術支援を行っていく。

①三倍体マガキとは？

- 産卵が抑制され身痩せしない
- 年中食べられる
- 夏の間も成長する

水産海洋技術センターが開発



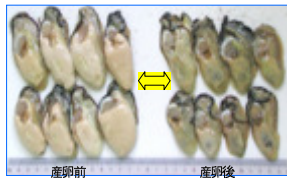
②一粒かきとは？

- 形が揃っている
- 殻に深みがある

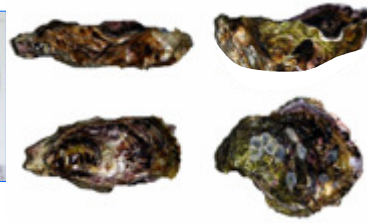


一粒かき

通常(二倍体)マガキ



夏期に産卵を繰り返して身痩せする



通常の養殖方法

図1 三倍体一粒かきの特徴

水産海洋技術センターが開発

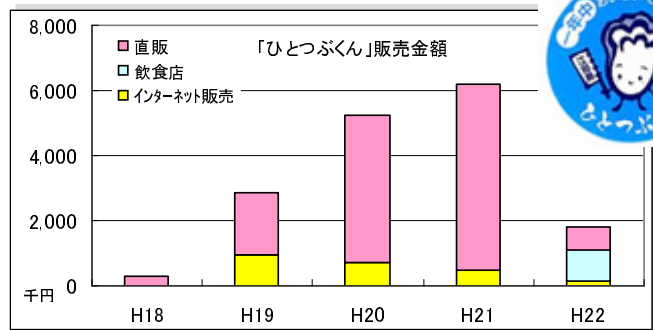
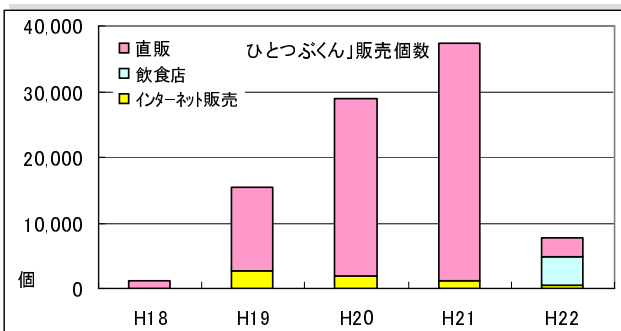


図2 江田島市水産物等販売協議会による「ひとつぶん」の販売個数および売上実績



図3 導入された浮きカゴ

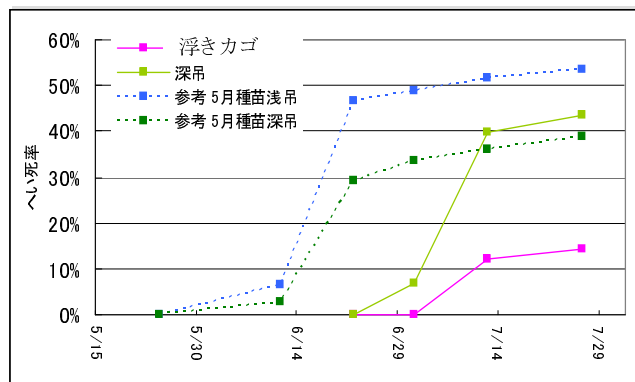


図4 浮きカゴによるへい死率低減効果



図5 三倍体一粒かきに付着した天然二倍体かき



図6 一粒かき生産者グループの検討会